法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

内村鑑三の信仰と日本 : 『余は如何にして基督信徒となりし乎』の場合

佐藤, 明

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
79
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
12
(発行年 / Year)
2017-10-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014282

内村鑑三の信仰と日本
―『余は如何にして基督信徒となりし乎』の場合―

人文科学研究科　哲学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程 3 年　佐藤　明

1.　はじめに

『余は如何にして基督信徒となりし乎』(1895)は、内村鑑三（1862-1930）が 32 歳の時に、少年時代から 27 歳までを「如何に基督信徒となりし乎」という主題に沿って回想し、当時の日記に説明を加える形で再構成した作品である。内村自身が作品の序で「余の通過した精神的生長の種々なる段階についての正直な告白である」[内村 1958:8]と述べていることもあり、内村がキリスト教に回心していく過程を考察するには第一級の資料とされる。しかし内村は、「如何にして基督信徒となりし乎」という主題に沿って自己を語るので、それと直接関係しない私生活についてはほとんど触れていない。(1)不敬事件から 2 年後の 1893 年に英文で執筆され、日清戦争終結後の 1895 年 5 月に日本で出版された。当初はアメリカで出版する予定で原稿はアメリカの出版社に送られたが返事がなかったため、まずは日本での出版となった。そして 11 月には友人ベルの尽力によってアメリカでも出版されている。

内村は札幌でキリスト教に入信するという第一の回心をし、アメリカでキリストによる救いの神秘に打たれるという第二の回心をしたが、彼の日本観はそれぞれの回心を機に変化した。この回心による日本観の変化が本作品を英文で執筆した重要な動機となっていると思われる。先行研究では、本作品を同時代の新渡戸稲造による『武士道』（1899）や岡倉天心による『東洋の理想』（1903）や『茶の本』（1906）などと同様に、日本や日本人固有の価値を西欧世界に紹介しようと志した作品としてとらえる見解[河上 1969:546 松沢 1971:30]、あるいは日本のナショナリズム文学の記念碑[亀井 1977:76]とする見解がある。こうした見解は本作品における日本の価値の表明を国粋的なものととらえているわけではない。(2) しかしそれらには内村の第二の回心の意味、すなわちそれが人類を救うキリストへの全面的帰依であったことが十分に反映されているとはいえない。本稿では内村の回心の過程を詳細に分析することにより、内村が本作品に込めた意図について新たな見解を提示することを試みる。テキストとしては主に鈴木俊郎の 1958 年改訳を用いたが、英語の原文と 8 種類の他の翻訳にも随時あたった。

2、儒教とキリスト教

本作品はまず、第二の回心後に既にキリスト信徒として信仰を確立した内村が過去を回想し現在の心境を述べるところから始まる。そこでは、異教国や異教国の文化である儒教に対する肯定的な姿勢が見られる。内村はキリスト教国と異教国を対比させ、「異教は暗黒の世界であるにしてもそれは月と星の世界である、疑いもなく薄暗い世界ではある」[内村 1958:14]と述べる。内村は異教国を明らかに「暗黒の世界」[内村 1958:14]としながら、それを全くの暗黒の世界ではなく、「薄暗い世界」[内村 1958:14]とすることで、それが光の世界に至る可能性があることを示す。そして少年時代に儒教教育を受けたことについて次のように述べる。

> 封建領主に対する忠義、親と師に対する誠実と尊敬は、シナ道徳の中心題目であった。孝は百行の本なりと教えられた、『エホバをおそるるは知識の本なり』というソロモンの箴言 (3) に似ている。寒中に筍が欲しいという年とった親の無理な要求に従い竹藪を探して雪の下から奇蹟的にその幼芽を発見したという孝子の物語は、ヨセフの物語が基督教国のすべての少年にそうであるように、余の国のすべての子供の記憶

にあざやかなのである。[内村 1958:15]

内村は、キリスト教国の教育の要は聖書で日本では儒教がそれにあたることを示し、両者は教育の要とするものがあるという点では共通していることを示す。しかし儒教では忠孝が中心となるのに対して、キリスト教では神に畏敬の念を抱くことが基本であることをあげることで両者の違いを示す。そこには儒教は人間が定めた社会規範にすぎないが、キリスト教は神の存在が社会秩序を形成する源になるという理解がある。しかしそれでも、中国に由来する孝行息子の話(4)と旧約聖書にあるヨセフの話(5)を例にあげ、たとえ自分が苦難にあっても親に尽くすという徳が子どもに説かれる点で両者は共通しているとする。この後には封建領主に対する忠義についての紹介が続くが、それはキリスト教との比較対象にはなっていない。むしろその次に儒教は「朋友相信ずべきこと、兄弟に友なるべきこと、目下や家来に寛大なるべきこと」[内村 1958:16]を強く主張するものであることが述べられていることが重要である。これはキリスト教の隣人愛を意識してのことだと思われる。そして内村は「こういう教訓は基督信徒と自称する多くの人々に伝えられ彼らにいだかれている教訓にくらべて劣るものではない」[内村 1958:16]と固く信じていることを述べる。ここで内村は、儒教の中でもキリスト教につながるものを特に強調している。このことからも内村にとって光の世界はあくまでキリスト教であることがわかる。儒教をシナ道徳と表現することからもわかるように儒教との比較は日本固有の価値を説くことではなく、あらゆる国がキリスト教とつながる文化を持っているので、それは簡単に否定できるものではないことを示すためだと思われる。内村がなぜそう考えるようになったのかについては次章以降で明らかにしたい。

3. 第一の回心

3-1 文明開化的キリスト教

内村は、札幌で入信を迫られた時、「我が国を万国以上にあがむべき」[内村 1958:21]とする愛国心から異教を信ずることに強く抵抗したが、周囲の圧力に屈する形で入信することになった。それまでの内村は、日本における多神教の世界観に支配されており、多数の神を拝まねばならないことに良心の呵責を感じていた。しかしキリスト教の唯一神信仰によって「理性と良心は唱和した」[内村 1958:25]のを感じ、救いを見出したのだった。そしてそのことは新しい認識をもたらした。それまでは「我が国を万国以上にあがむべきこと」[内村 1958:21]と教えられていたので、日本を「宇宙の中心、世界の羨望の的」[内村 1958:126]ととらえていた。しかしキリスト教に入信したことにより、その考えは一変した。そして日本は多神教という迷信の世界で宗教と道徳とが分離しているのに対し、西洋はキリスト教という唯一神信仰によって道徳が形成され社会の秩序が保たれているということ、そしてその一体感のもとに発達した文明があると考えるようになった。内村はその変化を次のように回想する。

> しかし余が『回心』したときいかに正反対になったことよ！（中略）まもなく一つの考が余の心をとらえた、余の国はじつに『無用の長物』であると。それを善くするために他の国々からの宣教師を必要とする異教国であった。天の神はそれについてけっして多くを考えたまわなかった、神はかくも多年それを全く悪魔の手の中にゆだねたもうたのである。その道徳的社会的の欠陥が話題になるとき、アメリカやヨーロッパではそうではないと我々は絶えず聞かされた。それはいつかマサチューセッツやイングランドのようになり得るかどうか、余はまじめに疑った。もし余の国が存在から拭い去られても世界はすこしも悪くはならないであろうと、余はほんとうに信じた。[内村 1958:126]

ここでは、それまで万国以上の存在であったはずの日本が「無用の長物」[内村 1958:126]とされ、キリスト教国はキリスト教国であるというだけで優れたものであるとされている。日本はキリスト教がないというだけで価値のないものとされ、長い間悪魔のもとにおかれていたという認識さえも示されている。このようにキリスト教国を理想化した内村は、まずキリスト教を次のように受容した。

新しい信仰は、その固有の精神的価値のためよりも、幸福な家庭、自由な政府などのような功利的の目的のためにより多く信ぜられた。『我が国を欧米のように強大にすること』が余の生涯の最高目的であった、そして余はそれをこの計画を実行するための大きなエンジンと考えたから基督教を歓迎したのである。[内村 1958:140]

ここでは、内村にとってキリスト教の受容は、何よりも文明開化的なものであったことが語られている。(6) 当時の日本は、欧米のような近代化を目指しており、内村もまたそれに貢献することを目指していた。キリスト教は西洋文明と一体化され、そのための原動力としてとらえられていた。日本の発展を願う愛国心が、手段としてキリスト教を求めたといえよう。ゆえにその信仰の特徴は、新しい文化としてアメリカ人教師からもたらされた「イエスを信ずる者の契約」に基づいており、まず律法を忠実に守ることにあった。それゆえキリスト教理解はまだ曖昧で、日記に「『預定』ニ就キテ困惑セリ」[内村 1958:57]とあるように、信仰生活を続けながらとまどったのは予定説であった。(7) 内村は神によって救われるものと罪に定められるものが決められているなら人間は努力する必要がないのではないかという疑いを抱いたが、その問題は脇において信仰生活を続けた。しかしこの問題はその後の内村の苦闘と歓喜に密接に関わることになる。

3 -2　信仰生活

内村は札幌農学校卒業後に仲間と共に独立教会を設立するが、その目的は次のように述べられている。

我々の独立は、メソヂスト主義に対する反抗としてではなく、天にいます我々の主に対する我々の真実の愛着と我が国民に対する我々の最高の感情との表現として意図されたものである。[内村 1958:82-83]

内村らが独立教会設立にいたるきっかけは、共に信仰生活を送った仲間が、洗礼を受けた教派によって聖公会とメソヂストに分かれてしまうことであった。「ひとりの永遠の神」[内村 1958:23]に忠実であるためには教会は一つでなければならなかった。内村らは、キリスト教の教えを忠実に守ろうとしたのだから、独立は「主に対する我々の真実の愛着」[内村 1958:82]の表現であったといえよう。また「我が国民に対する我々の最高の感情」[内村 1958:83]という言葉には、日本国民のために、キリスト教の教えに忠実な教会を日本人の手で創るという自負が表れている。内村らは、日本でキリスト教を求める人が、教派主義の弊害にとらわれないですむ道を開いたのであった。しかしあくまで律法を忠実に守りたいという気持ちが結果的に西洋追従でないものを生み出したのであって、そこに日本の独自性の追求や西洋のキリスト教に対する反抗の意図はないと思われる。(8)

独立教会を設立したものの、その後内村は「宗教事業の活動も科学的実験の成功も満たすことができない空虚な場所」[内村 1958:93]を自分のうちに見出し、その空虚さを満たすために札幌から東京に移った。だが満足は得られなかった。内村は東京の教会でリバイバル(9)やキリスト教の名のもとに行なわれる茶話会や晩餐会を経験したが、それらを「それ自身が空虚である感傷的基督教」[内村 1958:105]とみなした。そして、欧米への憧れをつのらせた。内村は、渡米する心境を次のように述べる。

望んだ満足を余自身の国土に見出すことができないで、余はラセラス(10)のように、余の国とは国柄を異にする国に― すなわち基督教国に ―余の探究を拡げることを考えた、そこでは基督教が数百年のあいだ疑う余地のない勢力と感化を及ぼして来たのであるから、平安と歓喜とは、異教生れの我々には思いおよばないような、真理の真剣な探求者には何人にも容易に獲得せらるるような、量をもって見出されるに相違ないと余は想像した。[内村 1958:105]

内村にとってキリスト教国は、キリスト教に支えられて政治経済や科学技術などの文明の発達とともに道徳性も発達していると思われた。そうであるなら慈善事業も発達しているはずである。内村は日本の「感傷的基督教」[内村 1958:105]に空虚さを感じていた時に「実践的の愛こそ基督教の本質ではないか」[内村 1958:101]と

思い、ジョン・ハワードの伝記やチャールス・ローリング・ブレースの著作を読んだ。(11)そしてそこに表れていることこそが「キリストを真に愛するすべてのものにふさわしい使命」[内村 1958:102]と思われ、それはキリスト教国ならではのものに違いないと考えた。そこでそれを本場アメリカで学びたいと思ったのである。しかし渡米の目的はそれだけではなかった。それは、次のように述べられる。

> しかし個人的満足の追求がこの大胆な歩みを取ることを余に強要した唯一の動機ではなかった。余を生んだ国土はその青年のすべてから何か国土の名誉と栄光に対する惜しみない寄与を要求する、そして余は余の国土の忠実な子となるため、我が国の境界のかなたに拡がる経験と知識と観察とを必要とした。第一に人となること、次に愛国者となることが、余の外国行きの目的であった。[内村 1958:106]

ここから内村の渡米目的には、慈善事業に従事することによってキリスト者にふさわしい善い人間になることと、日本の発展のために尽くす人間になるという二つの目的があったことがわかる。(12) 内村には、日本の現状は否定しても「我が国を欧米のように強大にする」[内村 1958:140]という強烈な愛国心があった。そのためにアメリカで様々な経験を積み、日本のために尽くしたいと思ったのである。この時の内村はアメリカをキリスト教と文明が一体となった素晴らしい国であると信じた。自分自身を満足させるためにも、国を豊かにするためにもアメリカに行くことが必要だったのである。

3-3　日本への愛着

内村の渡米の目的は、自分自身のためにも国のためにも本場アメリカのキリスト教を学ぶことが目的であった。この時点で内村はキリスト教に大きな期待をかけていたことがわかる。しかしアメリカに行くのはあくまで日本を善い国にするためであって、日本そのものへの愛情が薄れているわけではない。その感情は日本を離れる時に表れる。

> そして余の霊魂は余の天の父と余の先祖の亡き霊とに同様に向けられ、一種の黙想の中に祈祷と回想とを同時に行なった。教義学の先生たちは我々の行為がいかにも仏教的または法王的であるとして我々に対し顔をしかめられたかもしれない。しかしその時は我々の議論する時ではなかった。我々は我々の神、我々の国、我々の祖先を愛した、そしてこの厳粛な機会にそれらすべてを記憶したのである。[内村 1958:106-107]

渡米する前に、父によって祈祷の後に位牌の前に連れて行かれた時の様子を描いている。この前の部分には「別離の時の厳粛さは教理が抑えることのできない自然の情を我々から引き出した」[内村 1958:106]とある。内村も父も洗礼は受けているものの、本能的な部分で日本的なものに支配されていることを示している。仏教に基づき儀式的な行為を行なうことは、自分の信仰にはそぐわないとは思うもののそれよりも抑えがたい感情に従うことになったのである。この時にはキリスト教の神と日本と祖先は同じように大切にされている。しかしここでの感情は、「我が国を万国以上にあがむべきこと、我が国の神を拝して他のいかなる神をも拝しないこと」[内村 1958:21]というなかば強制的に教えられた愛国心とは区別される。それはその国に生まれ育つことによって自然に培われる性質のものであろう。また日本を出港する時には次のように述べる。

> かくも純潔な、かくも高貴にしてりっぱな母 ― 彼女の子らは彼女に忠信たるべきではないか。余は彼女の岸を去った、そして直ちに、他国の旗をひるがえし異人種の船員の乗組んだ船に乗った。船は動き始める、― 母国よ、サヨナラ、― 動揺数時間ののち、わずかの秀峰の巌が眺められうるのみ。『一同甲板に』と我々は叫ぶ、『愛する愛する国土にもう一度敬意を。』[内村 1958:107]

この前の部分には、「国を愛するの愛は、他のすべての愛のように、別離の時にその最善最高の状態にある」[内村 1958:107]と述べられている。そして船から眺める日本を「かくも純潔な、かくも高貴にしてりっぱな母」

[内村 1958:107]と形容し、その素晴らしさにふさわしくあろうとする。ここには日本への万感の思いと日本の将来のために新境地アメリカに旅立つ決意が込められている。

４．渡米

4-1　アメリカ社会への失望

渡米した内村は、アメリカ社会の現実を見て次のように述べる。

> 我々の国には、人間のうち最も疑い深い人が言ったものと思うが、こういう諺がある、『煙を見れば火事と思え、人を見れば泥棒と思え』と。しかしよく鍵のかかっているアメリカの家庭のようにこの命令が文字通り実行されているのを見たことがない。それは現代の横溢する貪欲に応ずるように変更された小型の封建的居城である。セメント造りの部屋と石造りの丸天井を必要とし、ブルドッグと警官隊とによって警戒される文明が基督教的と称されうるかどうかは、正直な異教徒の真面目に疑うところである。（内村 1958:115）

ここで内村は、西洋文明はキリスト教とは相容れないものであると考えるようになる。内村は入信時に署名した「イエスを信じる者の契約」によってキリスト教の誡めを知った。そしてそこに定められた隣人愛や窃盗の禁止は、キリスト教国では当然守られているものだと思っていたであろう。しかしアメリカでは、家に鍵をかけるのが普通で、ブルドックや警官隊によって治安が維持されるという現実があり、すでにキリスト教によって社会の秩序を保つ力は失われていた。その対比として日本のことを「我々の家は大概は誰にでも明け放しである。猫は楽しげ気に自由勝手に出入りし、人は微風に顔を吹かせて昼寝をする、しかも召使いや隣人にはいやしくも我々の所有物を犯す心配は感じられない」[内村 1958:114]と述べる。人間同士の信頼関係が成り立っているということでは、むしろ日本の方がキリスト教的であるとさえ感じたと思われる。また内村は人種差別の現実にも失望した。アメリカでは「インディアン人とアフリカ人に対して強烈で非基督教的」[内村 1958:115]な態度が見られるだけでなく、中国人に対する偏見・嫌悪・反感も激しかった。アメリカ人は中国に宣教師を送ってキリスト教に回心させようとする一方で、自国に来る中国人に対しては嫌悪感を露わにするのだった。内村はそこにキリスト教の外国伝道の欺瞞を感じた。そしてアメリカ人の中国人への対応と日本人の西洋人への対応とを比較して、次のように述べる。

> 願わくは我々の国土にいるコーカサス人種在留者の不正行為が数えられ、シナ人の　それと量りくらべられんことを！もし我々がアメリカにいる孤立無援のシナ人に為される半分だけの侮辱を我々の国土に在留するアメリカやイギリスの市民に為したとすれば、我々は間もなく砲艦隊に見舞われ、正義と人道の名において、その唯一の価値は彼らが青い目と白い皮膚をもっていることにあってそれ以上の何ものにもないあの無価値な浮浪人の生命のために、頭割り五百ドルを支払うことを強要せられるであろう。[内村 1958:118~119]

内村は、アメリカ人は中国人の不正行為を問題にするが、日本における西洋人在留者の不正行為はそれよりも多いことを指摘する。しかしもし日本がそれを理由に日本にいる欧米人を差別したら欧米人にとってそれは大問題になることを述べる。内村は中国や日本が東洋の異教国であることを理由に差別されることには強い抵抗感を感じたのであった。そしてキリスト教の教えに反するキリスト教国のあり方に憤りを感じた。

さらに内村は、アメリカ社会に聖名濫用、金銭万能主義、宗教における教派的嫉妬などがあることにも失望し、その騒がしさにも辟易した。そして「おお、日出る国の安息、蓮池の静寂が慕わしい！」[内村 1958:123]と日本を懐かしんでいる。こうした経験から、内村は「もしも今日のいわゆる基督教国をつくったものが基督教ならば、天の永遠の詛いをしてその上にとどまらしめよ！」[内村 1958:123]という言葉まで吐いている。内村は西洋文明はキリスト教の倫理体系の上に成り立つと考えていたのだが、必ずしもそうではないという認識を得たのであった。しかし内村にとって唯一神信仰に基づく倫理体系を持つキリスト教そのものの魅力や、ア

メリカのどこかにキリストを真に愛する者による行為が見られるはずだという期待が失われたわけではなかった。したがってその思いを残したままアメリカ滞在を続けた。

4-2　慈善行為における苦悩

内村は渡米後まもなく慈善事業に従事したいという希望通り、病院で看護人として働くことになった。渡米前の内村にとって慈善事業に従事することは、キリスト教の本質をつかんで空虚な心を満たすという前向きなものとして語られていた。しかしここでは、それがかなり切羽詰まったものであることが語られる。内村は病院勤務に入ったことをルターをエルフルト僧院に遂いやった(13)のとやや同じ目的であるとして、次のように述べる。

> 余はただそれを『来るべき怒り』からの唯一の避難所であると考え、そこで余の肉　　を服従させ、内的純潔の状態に到達するように自信を訓練し、かくして天国を嗣ごうとしたためである。心底ではそれゆえ余は利己的であった。そして利己主義はいかなる形で現れても悪魔のものであり罪のものであることを、余は幾多の悲しい経験によって学ぶにいたった。慈善の要求するものは完全な自己犠牲と全部的の自己滅却であるが、余がその要求に自分自身を合致させようと努力するなかに、余の生来の利己心はそのあらゆる怖ろしい極悪の姿をもって余に現わされた、そして余自身の中に認めた暗黒に圧倒されて、余は意気消沈し、言うべからざる苦悩に悶えた。[内村 1958:131]

ここからは、内村にとって慈善事業に従事することは自らの救いの手段にすぎなかったことがわかる。内村は完全な自己犠牲の精神ではなく利己的理由から慈善事業を行うことに霊的苦悶を覚えた。そして約 8 ヵ月間勤務した後、耐えきれなくなって病院を後にした。内村はこの時「慈善『愛人』事業は、余の『愛己』的傾向が余の中にて全く消滅せられるまでは余自身のものではないこと」[内村 1958:151]を知ったとしている。このことから渡米前に内村が抱いていた計画、すなわち慈善行為を為すことによって善い人間になれるという期待は打ち砕かれたことがわかる。この時の内村は自らの利己心による罪の意識に苛まれ、自己閉塞状態にあったといえる。

5. 第二の回心

5-1　回心

病院を去ってから、内村は約半月後にアマスト大学に入学する。そこで総長の信仰的感化により自己閉塞状態を脱して回心に至る。総長は「神を聖書を、またすべてのことを成就する祈りの力」[内村 1958:157]を信じる「聖なる人」[内村 1958:15]で、「言葉と行為」[内村 1958:158]とによって内村に貴重な教訓を与えた。内村の回心は日記には次のように記されている。

> 「キリスト」ノ贖罪ノ力ハ今日ノ如ク明瞭ニ余ニ啓示セラレシコト嘗テアラザリキ。神ノ子ガ十字架二釘ケラレ給ヒシ事ノ中ニ、今日マデ余ノ心ヲ苦シメシ凡テノ難問ノ解決ハ存スルナリ。「キリスト」ハ余ノ凡テノ負債ヲ支払ヒ給ヒテ、余ヲ堕落以前ノ最初ノ人ノ清浄ト潔白トニ返シ給ヒ得ルナリ。今ヤ余ハ神ノ子ニシテ、余ノ義務ハ「イエス」ヲ信ズルニアリ。[内村 1958:163]

ここに至って内村は、キリストの十字架上の死がまさに罪深い自分を救うためのものであったと理解した。そしてただそれを信じることで救いが善行によらずとも神から恵みとして与えられること、つまり「人は律法の行ないなしに信仰によって義とせられる」[内村 1958:139]ということを悟った。内村はこの体験について「余は自分自身を征服するにもはや余の空しい努力に頼らず、そのためには宇宙の大能力に訴えるにいたるまでに、立て直されたのである」[内村 1958:179]と述べる。内村にとってそれまで神は、裁く神であった。病院で慈善行為に従事したのもそれを「『来るべき怒り』からの唯一の避難所」[内村 1958:131]ととらえたからでもあった。しかしキリストの贖罪をわが身に感じることで裁く神は赦す神に転換したのである。そして 3 ヵ月後には

回心したことで、かつては疑わしいと感じた予定説を肯定できるようになったことを次のように記す。

> 預定ノ教義ヲ研究シ、其ノ意義ニ強キ感銘ヲ与エラレヌ。心ハ歓喜ヲ以テ躍レリ。誘惑ハ退散スルガ如ク思ハレ、余ノ心ノ高貴ナル性質ハ悉ク感激ヲ以テ燃ユ。恐怖何処ニカアル、モシ余ガ神ノ選民ノ一人ニシテ、世ノ其ノ置カレザル前ニ彼ノ世嗣トシテ預定セラレシナラバ！[内村 1958:166]

内村は、「かつて余の大きな躓きの石となった教義は、今や変じて余の信仰の隅の首石となるにいたった」[内村 1958:166]として、自分が神に選ばれた者であることを確信するならば恐れるものは何もないと語る。そして「神を喜ばせようと最善を尽くしつつあると同時に自分の選びについて本当に容易ならぬことと心配する人々は必ずや選民の間に自分自身を見出すと信ずる」[内村 1958:166]と述べて、回心に至るまでの霊的苦悶こそが選民であることの証だとする。2 日後にはそれをさらに深めて次のように記す。

> 嗚呼、凡テノ基督信徒ヲ謙遜ナラシムベキ思想ヨ！余ハ選民ノ一人ナラザルベカラズ、トハ、何タル価値ヲ余ニ与フルモノゾ！而モ余ハ日々罪ヲ犯シツツアルコトヲ思フベシ！[内村 1958:166]

内村にとって予定説を肯定できたことは神への謙遜をもたらした。予定説は自分が日々罪を犯しつつあるにもかかわらず神からの救いが約束されていることを説くからである。内村はそれを「日に日に自己に死ぬこと、それが選びである」[内村 1958:166]と表現する。そして神の救済の性質については後日次のように記す。

> 余ノ霊魂ノ救拯ハ、余ノ霊魂ト此ノ世ノ運命トノ状態如何ニ全然無関係ナリ。(中略)救拯ハ神ノモノナリ、而シテ如何ナル人モ物モ境遇モ余ヨリ其ヲ奪フコト能ハズ、其ハ山ニモ優リテ確実ナリ。[内村 1958:167]

このように内村は神の救いが現世の状態には全然関係ないことや、救いは神のもので人が
それを変えることはできないことを確信したのであった。そして救いが人間の力の及ばない神のものであることを悟ったことにより、自己閉塞状態から脱することができた。さらに回心から約半年後、内村は救いに達するための苦しみが自分ひとりのものではなかったことに気づく。その体験は日記に次のように記されている。

> 「デーヴィット・ブレーナード」(14)ノ伝ヲ読ム。彼ノ日記ヲ読ミテ、余ハ余ノ日記ヲ読ミツツアルカノ如クニ感ジタリ。『凡テノ余ノ困難ヲシテ耐エ難カラシムルモノハ、神ソノ聖顔ヲ我ヨリ隠シ給フコトナリ』ト彼ノ言フ箇所ニ来リシ時ニ、余ハ泣カザルヲ得ザリキ。シカシ余一人ガ唯内外ノ棘ヲ以テ神ニ試練セラルルニ非ザルコトヲ思ヒテ、甚ダ慰メヲ得タリ。彼ノ如クカカル祝福セラレ試練ヲ経タル人々ト共ニ天ニ於イテ有スル彼ノ快キ交際ヲ想望セリ。[内村 1958:171]

ここでは、ブレーナードを自分と同じような霊的苦悩を経験した人間としてとらえている。そしてそうした人間と共に救いに達する喜びを分かち合いたいという気持ちが記されている。ここで内村にとって救いの根拠とされているものは、信仰義認説(15)と予定説である。信仰義認説は、人間は行ないによらず信仰によってのみ義とされるということである。予定説は救われる人間は神によってあらかじめ定められており、その救いは人間の善行には一切かかわりがないというものである。予定説において人間は神の意志を実現するために奉仕するべきであるとされる。そしてその奉仕の場として召命、すなわち神からの使命が与えられているのである。内村はこうした思想に基づき、日本や世界の国々を眺めるようになった。それは日記に次のように記されている。

> 神ノ摂理ハ我ガ国民ノ中ニアラザルベカラズトノ思想ニヨリテ多大ノ感動ヲ受ケタリ。モシ凡テノ善キ賜物ガ彼ヨリ出ヅルナラバ、然ラバ我ガ国人ノ称讃スベキ国民性ノ中ニ至高キ処ヨリ来タリシモノモ亦タアルニ相違ナシ。我々ハ我々自身ニ特有ノ天賦ト賜物ヲ以テ、我々ノ神ト世界トニ仕フベク試ミザルベカラ

ズ。神ハ二十世紀間ノ鍛錬ニヨリテ達セラレタル我ガ国民性ガ、米欧思想ニヨリテ全ク置キ換エラルルヲ欲シ給ハザルナリ。基督教ノ美ハ神ガ各国民ニ与エ給ヒシ凡テノ特殊性ヲ聖メ得ルコトナリ。福ニシテ奨励的ナル思想ナル哉、日ヽヽモ亦タ神ノ国民ナリトハ。[内村 1958:172-173]

内村はここで、まず神の摂理が日本国民に働いていることを示す。(16) 自分が罪人であるにもかかわらず救われるという確信を得たことで、異教国という弱い立場にある日本も救われるに違いないと考えたのだ。その証として日本国民の国民性の中には神から与えられた賜物があるので、その賜物によって神と世界に仕えるべきだとする。その賜物から成る国民性は神によって定められたものなので、人間の側からは変えることができない。したがって日本の国民性は米欧思想によって置き換えられるものではないとする。またここにおいて内村が二十世紀の間の鍛錬と表現するのは、日本がキリスト教のない状態、いわば闇の中に自力でもがきながらとどまっていたことをさすと思われる。今やそこに神から救いの手が差し伸べられ、日本は光の中に再生するというのが、内村の考えであろう。内村はキリスト教入信直後には、神が日本を多年悪魔の手にゆだねたとしていたが、神は日本の救いを定めた上で日本を試練のもとにおいたと考えられるようになった。そして現実社会では、異教国である日本はキリスト教国から遅れた国とみなされているが、神の前ではそうした区別はないことを確信したのだった。

しかしここで重要なのは、「我ガ国民」、「我ガ国人」、「我ガ国民性」という表現があるとともに「各国民」という表現が使われていることである。内村は「基督教ノ美ハ神ガ各国民ニ与エ給ヒシ凡テノ特殊性ヲ聖メ得ルコトナリ」[内村 1958:163]として、日本だけが神に選ばれて賜物を与えられているわけではないことを示す。神はすべての国を救うという計画のもとそれぞれの国にふさわしい賜物を授けているので、どんな国も他国の尊厳を犯すことはできないとするのだ。したがってその前に用いられている「我ガ国人ノ称讃スベキ国民性」[内村 1958:163]という表現は他国に対する優越性を説くものではない。内村は全世界を神の支配のもとにある一つの国ととらえ、日本もまたその一員であることを喜びとした。そしてその神の国では、各国が神から授かった特殊性を生かして神に奉仕し互いに尊重し合うことが求められるとした。内村は第二の回心を契機として、全世界に及ぶ神の普遍的な力に対する目を開き、日本と他国との関係は対等であるととらえたのだった。

5-2　神の共同体

内村は、神の救いの計画のもと各国にそれぞれ特殊性が与えられている中で、日本にはどのような特殊性が与えられているのかについて、帰国するにあたって思い巡らした。そうすることで、日本が神から与えられた使命も明らかになるからである。そして日本が異教国であることに特殊性を見出した。内村は「余を『異教徒』として、そして基督信徒としてでなく、この世に生みだしたもうたことを幾度となく神に感謝した」[内村 1958:201-202]として、その理由を次のように述べる。

なぜなら異教徒として生まれる幾多の利益があるからである。異教を余は人類の未発達の段階であって、基督教のいかなる形態によって達せられた段階よりもよりよりより高いよりよりより完全な段階に発展し得べきものと考える。尽きざる希望が、すべての先人のそれよりよりよりより壮大な人生にむかって冒険を試みる青年の希望が、基督教によって触れられていない異教諸国民の中にあるのである。そして余の国民は歴史上では二千年以上の年齢であるけれども、キリストにおいてはまだ子供であり、未来のあらゆる希望と可能性はその急速に進歩しつつある日々のなかに隠れているのである。[内村 1958:202]

ここで内村は、日本国民が二千年以上の歴史を持つが、キリスト教においてはまだ子どもであることに価値を置く。そしてこの記述の後には、異教徒として生まれ聖職者からほとんどキリスト教の教えを受けたことのない目でとらえたキリスト教観が示される。それによれば「純粋単純な基督教と、その教授たちによって装飾され教義化された基督教との間に、厳格な区別を設けることは必要かくべからざること」[内村 1958:203]となる。その場合「純粋単純な基督教」[内村 1958:203]は「ナザレのイエス」[内村 1958:203]そのもので、「装飾され教義化されたキリスト教」[内村 1958:203]は神殿、伽藍、教会、教義などをさす。内村はキリスト教にお

いて子どもである日本国民には「純粋単純な基督教」[内村 1958:203]を受け入れ発展させていく可能性があるとするのである。また「未来のあらゆる希望と可能性はその急速に進歩しつつある日々のなかに隠れているのである」[内村 1958:202]と述べていることから、日本の近代化については肯定的にとらえていることがわかる。ただしアメリカにおける文明が自分の理想とは違っていたことを知ったので、渡米以前にひたすら西洋に憧れた気持ちはなくなり西洋にただ追従する形の近代化には否定的である。しかし、日本人が「純粋単純な基督教」[内村 1958:203]を身につけることによって、文明をよりよい形にしていけるのではないかと考えていると思われる。

さらに、日本人はキリスト教を受容することによって善悪を区別する力やみなぎるような生命力が生まれるとするが、その一方で日本人が「二十世紀間ノ鍛錬」[内村 1958:173]によって育んできた道徳性を評価する。そして「仏陀、孔子、その他の『異教の』教師たちの教えた人生の正道は、基督信徒がこれを注意深く研究すれば、何か自分たちの以前の自己満足を恥かしくおもわせるものである」[内村 1958:206]とか「基督教回心者のうち最もすぐれた人々は仏教や儒教の精髄をけっして捨てなかった」[内村 1958:206]と述べる。神は日本を異教国という闇の中におきながらもキリスト教を受容させる準備を整えていたのであり、そこに神の救いの業があるとするのが内村の考えであろう。本作品の冒頭において、儒教の教訓とキリスト教との共通性を示したのはこの理由による。内村は日本の特殊性についてはこのように考えたのである。

ではアメリカについてはどうか。内村はキリスト教の伝統があることをアメリカの特殊性ととらえた。内村はアメリカ社会の闇の部分に触れて失望を味わったが、そのアメリカで善き師に出会って回心することができた。それはキリスト教の伝統なしには不可能なことであった。アメリカにはキリスト教倫理からはずれた闇の部分がある一方で光の部分も多く見出せる。例えば見返りを求めずに他人に善をなす人々が多く見られること、南北戦争のような人道的目的による戦争が支持されたこと、復活信仰に支えられているので人々がいつまでも若々しいことなどである。内村は、神が異教国日本を闇の中から救い出すように、キリスト教国アメリカには光の部分によって闇の部分を克服し再生する力を与えていると信じた。(17)そして神の力はこのように日本にもアメリカにも働いているので、それは世界各国に及んでいるに違いないと考えた。

内村は「この世は一単位であり、人類は一大家族である。これは余が余の基督教の聖書において読むところである」[内村 1958:221]と述べている。このように世界を神の摂理に基づく共同体としてとらえた内村は、世界の国々は対等な関係にありそれぞれが神から定められた役割を持つととらえた。こうした考えを抱いて帰国した内村は、「余もまた、彼の貧しい僕であるが、基督教国において余が追い求めて来たすべてのものを得たのである」[内村 1958:230]という感慨をもらしている。ここからは内村が渡米前の「感傷的基督教」では得られなかったものをつかんだことがわかる。それは罪深い人間を救う全能の神をただひたすら信じることであった。そしてそれこそ「人間の希望」[内村 1958:231]であり「万民の生命」[内村 1958:231]であるとみなしている。内村にとってキリスト教は、日本を善くするだけのものではなく世界を一つに結ぶものとなったのである。本作品は、内村が将来『余は如何にして基督信徒として働きし乎』という書物を記す決意を述べて終わる。そこにはキリスト教の普遍的な力に対する讃美とそのために尽力したいという思いが込められている。

6. おわりに

内村は札幌における第一の回心によって、唯一神信仰のキリスト教に魅せられ、その信仰のもと発達した文明を持つアメリカにひかれた。キリスト教をまず文明開化的に受容した内村にとって、キリスト教の救いとは律法を守ることによって与えられるものであり、日本は西洋に劣る存在として把握された。しかし様々な苦闘を経てアメリカで第二の回心を経験した後には、その信仰と日本観は全く違うものとなった。

内村は完全な善行を成し得ないことに苦しんでいた時に、キリストの贖罪という啓示によって救われた。その結果人間の救いが善行ではなくただキリストへの信仰によって神から恵みとして与えられることを悟った。そして救いが神の絶対的主権のもとにあることを理解したことから、全世界を神の意志に基づく共同体とみて、日本も他の国々もその中にあるととらえるようになった。さらに自らの経験を日本や他の国々に投影し、それぞれの国が神から救われるべく定められているとみなした。ゆえに異教国という闇の中にいた日本も、今は闇の部分が多いように見えるアメリカも、他の国々もすべて神の救いの業に与ることができ、国と国との間には

優劣はないと考えた。そしてその証として各国にはそれぞれ神から授けられた役割があるとした。つまり内村にとって日本は、他の国々と対等な価値を持ち、共に神に奉仕する存在となったのである。

内村は本作品のアメリカ版の序文において、出版に尽力した友人ベルに讃辞を贈っている。そこで強調されているのは「相互の信仰の普遍性」[内村 1958：233]であり、それによって年齢と国籍の相違を越えた結合が保たれたとしている。そして本作品から「何らかの善いこと」[内村 1958:233]が生まれることを期待している。この序文は掲載されることはなかったが(18)、本作品に対する内村の思いをよく表している。内村は第二の回心の体験を深めることによって全世界に及ぶ神の救いの力を信じるようになった。したがって本作品における内村の意図は、異教徒であった自分の回心の過程を描くことで神による救いの力を発信し、人々がそれを信じることによって全世界が一つに結ばれるという希望を表明することにあったといえる。

註

(1) 鈴木俊郎は、この理由から本書を内村自身のこの時期の伝記的記述と考えるのはあたらないとする。そして本書に頭文字等で現れる記述に一々実在の人物をあてはめ、それによって本書の自伝的性格を確かめようとする努力は、かえって著者の手法に無用な介入をする結果に陥るおそれがあるということを本書の解説で述べている[内村 1958:274-275]。本稿もこの見解にならい、実在の人や物と対応させることは最小限にとどめ、テキストに書かれていないことには踏み込まずに、内村の記述に従ってその心境のみを明らかにすることに努めた。

(2) 本作品における日本の価値の表明について、河上は「新輸入の鏡に照らした自己分析の報告」〔河上 1969:546]としており、松沢は「キリスト教の福音に基礎をおいた、世界における日本の自己主張」[松沢 1971:36]としている。また亀井は本作品をキリスト教信仰の告白文学だともみなしており、そのナショナリズムを「あくまでキリスト教によりながら、しかも西洋中心の価値観をねじ伏せ、それを乗り越える可能性を日本の精神のなかに見出し、強調している」[亀井 1971:85]とする。いずれも国粋的というよりは異教国日本の価値の発見を強調するものである。

(3) ソロモンは、イスラエルの王ダビデの子で 3 代目の王。この言葉は旧約聖書の箴言第 1 章 7 節にある。

(4) 中国の孝行息子は『今昔物語』に登場する孟宗である。

(5) 旧約聖書の創世記に登場するヨセフは、父ヤコブの寵愛を受けたため異母兄たちの嫉妬され隊商に売られてしまう。そしてエジプトで奴隷となり苦難を味わうが、やがて夢の解き明かしの能力を認められ宰相にとりたてられる。その時に故郷で大飢饉のため苦労している兄に再会し、父親と兄たちを呼び寄せた。

(6) 内村の第一の回心後のキリスト教受容については、「この回心は「文明開化」的な合理性と近代性への回心であったといえる面が大きいのである」[亀井 1977:29]という見解がある。

(7) 本作品における 1880 年 12 月 26 日の日記には、ロマ書の 9 章について議論がなされたとある[内村 1958:57]。カルヴァンの予定説はロマ書に由来しており、ピューリタニズムの中核となる思想である。内村はこれ以前の信仰生活においてピューリタニズムの影響を受けたことを本書で述べるが[内村 1958:37-38]、その理解においては禁欲的な生活の方が重視されていたと思われる。

(8) 内村は死の一年半前、小樽における講演で独立教会設立時のことを「当時の私供青年の意気は実に盛なる者でありまして、積丹岬以北には再び外国産の基督教を入れざるべしとの事でありました」と述べている。本作品には当時このようなあからさまな外国批判があったとは書かれていない。本作品執筆時と晩年の外国に対する意識の違いを反映しているとも考えられる。これについては別に考察が必要であろう。

(9) リバイバルとは信仰覚醒運動のことである。プロテスタント諸派において既成の宗教制度、教義、慣行などに安住している信徒の宗教的情熱を呼び起こし、新しい信徒を獲得しようとする運動。日本では 1883 年 1 月横浜での初祈祷集会を契機に全国で起った。

(10) 英国の文豪サムエル・ジョンソンの教養小説「ラセラス」(『アビシニアの王子』と題して 1759 年に出版）の主人公。ラセラスは高い山に囲まれた楽園「幸福の谷」に閉じ込められていたアビシニアの王子であるが、いかなる人生が最も幸福であるかを知ろうとして、そこを逃れエジプトに行くが、失望して故国に帰ったという物語。

(11) ジョン・ハワード（1726－1790）はイギリスの監獄改良家。ローリング・ブレース（1826—1890）はアメリカの慈善家および著述家。

(12) 内村のアメリカ行きの直接の原因は、離婚問題のため傷心から逃れるために周囲から勧められたからであった。それ

は 1884 年 10 月 27 日の宮部金吾宛の書簡からわかる。(13)ルターは、激しい雷雨にあったことで落雷の恐怖を感じ死を予感した。そして救われたいという切実な思いからエルフルトで最も厳格なアウグスチノ修道院に入った。

(14) デーヴィッド・ブレーナード（1718-1742）はアメリカの伝道者。ペンシルヴァニア州およびニューヨーク州でアメリカ・インディアンの間で伝道した。

(15) ルターがパウロの「ローマ人への手紙」をもとに説いた。内村は第二の回心について述べた直後に、ルターの信仰を真実だと述べている。[内村 1958:164]

(16) 本作品を西欧世界に対する日本固有の価値の表明とみなす河上は、この部分を「日本をそのまま聖化しようとする、否、日本がこんな立派な国だからそれができるという異教主義が、鑑三の思想の根底である。そしてそこには、日本がそれなりの高度な文化を持っていたから、この高度の宗教を受け入れる力があるのだという誇らかな思想」[河上 1969:540]と解釈する。一方松沢は本作品の意図については河上と同じ見解であるが、この部分には諸国民がそれぞれ神からかけがえのない個性を与えられているがゆえにその価値は対等であるとする視点がみられることを評価している[松沢 1971:36-37]。

(17) アメリカに光と闇が共存していることを内村が強く感じとっていることは、鈴木範久によって指摘されている[鈴木 2012:79-80]。また武田清子は本作品において内村が日本とアメリカという二つの異文化を比較文化的視点で浮かび上がらせているとする。そして「アメリカは大きな悪を持っているけれども、それを克服する力を持っている。異教国である日本、しかしそこにはまた特有の良いものがある。これがキリスト教によって新しくされると、どんな良い国になるだろうか。そういった問題を投げ掛けられて、彼は帰って来た」[武田 1995:9-10]と解釈している。こうした見解は、本作品を日本固有の価値の表明とする見方とは一線を画するものであろう。

(18) 鈴木俊郎は、この序文は出版に間に合わなかったか、あるいはベル氏の意向によって載せられなかったとみている。内村自身は 1895 年 12 月 14 日のベル宛ての書簡において序文の掲載を強く望んでおり、第 2 版での実現を願っていた。

参考文献

内村鑑三 1910「余は如何にして基督信徒となりし乎（一）」逢阪信吾訳『聖書之研究』125：3-14 聖書之研究社

内村鑑三 1910「余は如何にして基督信徒となりし乎（二）」逢阪信吾訳『聖書之研究』126：18-26 聖書之研究社

内村鑑三 1910「余は如何にして基督信徒となりし乎（三）」逢坂信吾訳『聖書之研究』127:5-19 聖書之研究社

内村鑑三 1972『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』大内三郎訳 講談社

内村鑑三 2015『ぼくはいかにしてキリスト信徒になったか』河野純治訳 光文社

内村鑑三 1935『余は如何にして基督信徒となりし乎』鈴木俊郎訳 岩波書店

内村鑑三 1958『余は如何にして基督信徒となりし乎』鈴木俊郎訳 岩波書店

内村鑑三 1972 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』鈴木範久訳 白凰社

内村鑑三 2017『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』鈴木範久訳 岩波書店

内村鑑三 1955 『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』山本泰次郎・内村美代子訳 角川書店

内村鑑三 1980-1984『内村鑑三全集全 40 巻』岩波書店

河上徹太郎 1969『河上徹太郎全集第 3 巻』筑摩書房

亀井俊介 1977『内村鑑三　明治精神の道標』中央公論社

亀井俊介 1988『ナショナリズムの文学　明治精神の探求』講談社

カルロ・カルダローラ 1978『内村鑑三と無教会　宗教社会学的研究』田村光三ほか訳　新教出版社

川端伸典 2001「内村鑑三の回心をめぐって『二つの J』の意味したもの」『日本の哲学』2：96-110

黒川知文 2012『内村鑑三と再臨運動　救い・終末論・ユダヤ人観』新教出版社

嶋田順好 2007「『余は如何にして基督信徒となりし乎』における内村鑑三」『キリスト教と文化』23：81-103

鈴木俊郎 1986『内村鑑三伝　米国留学まで』岩波書店

鈴木範久 1984『内村鑑三』岩波書店

鈴木範久 2012『内村鑑三の人と思想』岩波書店

武田清子 1995『峻烈なる洞察と寛容　内村鑑三をめぐって』 教文館

田宮正晴 1993「西洋文明の衝撃と新たな日本精神の確立―ラフカディオ・ハーンの『ある保守主義者』と内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』を巡って―」『明治大学論叢』252：45-77
マーク・R・マリンズ 2005 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高碕恵 東京トランスビュー
松沢弘陽編訳 1971『内村鑑三　日本の名著 38』中央公論社
山本泰次郎 1964-1965『内村鑑三日記書簡全集 5-8 巻』教文館